

正課外の異文化間協働活動の実践と難しさ
—参加学生のインタビュー分析を通して—

山内美穂

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

正課外の異文化間協働活動の実践と難しさ —参加学生のインタビュー分析を通して—

山内美穂（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

要旨

正課外の国際共修に参加した学習者は国際共修をどのようにとらえているのだろうか。参加している中で参加のしにくさや難しさなどは生じないのだろうか。筆者は2021年10月から半年に渡って正課外の国際共修として異文化間協働活動を実施した。その参加者のうち10名を対象にインタビューを実施し、M-GTAを用いて分析した。結果、【困難】カテゴリーには「スケジュール調整」「留学生との意思疎通」などの概念が生成された。【困難】のために活動をやめてしまった参加者もいたが、【異文化間協働活動戦略】を見出すことで【困難】を乗り越えていった参加者の姿も見えた。「スケジュール調整」の【困難】を少しでも軽減するためには活動が続けやすい常設の場づくりも必要なことが示唆された。

キーワード：

国際共修、正課外、異文化間協働活動、困難、M-GTA

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 研究方法
 - 3.1 実践の概要
 - 3.2 インタビュー調査と分析
4. 分析結果と考察
 - 4.1 結果図の概要
 - 4.2 参加前の期待
 - 4.3 活動での気づきや困難さ
 - 4.4 異文化間協働活動戦略
 - 4.5 活動を振り返って
5. 考察
6. まとめと今後の課題

1. はじめに

多様な言語や文化背景を持つ学習者同士がその多様性を学習リソースとして学びあう授業や活動の実践が、近年、日本国内の多くの教育機関で広まっている。これは、2000年ごろからの高等教育機関の国際化の進展や、1983年に始まった「留学生10万人計画」とそれに続く2008年の「留学生30万人計画」などの留学生受け入れ政策による学習者の多様化に伴うもので、この20数年で多くの実践事例や研究・調査などが報告されている。坂本ほか（2017: iii）は上述したような協働・交流活動を多文化共修と呼び、「文化背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティ（正課活動及び正課外活動）において、その文化的多様性を学習リソースとしてとらえ、メンバーが相互交流を通して学びあう仕組み」と定義した。さらに末松（2019: iii）では国際共修と呼び「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験」と定義している。本稿でも国際共修という語を使用し、論を進めていく。

このような多文化環境における共修は、学習者の異文化間能力（intercultural competencies）（カルトン, 2015; Byram, 1997; Deardorff, 2006）の発達に大きく寄与することが、米国の9大学で実施した調査（Sonia・Troisi, 2013）他で明らかになっており、そのほかにも異文化や自文化の理解への促進やコミュニケーション力の向上などの様々な学習効果が国内外の実践報告・研究で報告されている。

国際共修は正課の授業科目としてだけではなく、正課外でも少なからず実践され、様々な成果が報告されている。しかし、正課外の国際共修は正課とは異なるメリットもある一方で、正課外ならではの課題もあることが分かってきた。日本国内の正課外の国際共修を概観したうえで、国際共修を担当した教職員を対象にしたインタビューを分析した川平（2019: 23）によると正課外の国際教育交流は「学生・教職員共に形式的なものから離れ、自由に表現する機会であること」や「学年や専門性を越えて交流を深めることができ、学生間の縦・横の繋がりを醸成することができる」ことがメリットとしてあげられるが、一方で、正課に比べて自由度が高いだけに、「どの程度の教育的介入を行うべきか」「自らの影響力を意識した上で、いかに学生の主体性を引き出しながら支援するか」などで悩む担当教職員の姿も浮き彫りにしている。

では、正課外の国際共修に参加した学習者は国際共修をどのようにとらえているのだろうか。参加している中で参加のしにくさや難しさなどは生じないだろうか。

筆者は2021年10月から半年に渡って正課外の国際共修として異文化間協働活動を実施した。その後の参加学生を対象としたインタビューでは共修から「得られたこと」も多くあったというコメントが聞かれた一方で、途中で活動を続けられずやめてしまった学生もいた。この学生たちが活動をやめてしまったのは何が原因だったのか。また最後まで活動が続けた学生は、活動の中で参加のしにくさや困難を感じることはなかったのか。あったと

すれば、それをどのように解決したのであるか。このような疑問をもって分析を行った。本稿では、インタビューから見てきた、参加学生の側から見た正課外国際共修について考察する。

2. 先行研究

国際共修は、留学機会またはその意志のない学生に対し、国内で異文化体験を提供するものとして、「Internationalization at Home」(内なる国際化)という概念(Crowther, 2000)が取り入れられた教育活動という側面ももっており、末松(2019)の国際共修関連文献調査によると、日本国内では1990年代半ばから実施されている。2000年以降は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、オンラインを含め(高橋, 2021)、特に様々な形態の国際共修が実施されている。その多くは単位が付与される正課であるが、単位が付与されない正課外の国際共修も実践が重ねられている。溝上(2009)では、大学教育の正課外活動について、学生の自主性の向上などの観点からその意義が述べられ、正課・正課外活動のバランスの取れた教育内容の必要性が指摘されている。先述した川平(2019: 23)でも「正課では開示しきれていない個性を発信・受信する機会」として、正課では得られない学習の場となっていることが述べられている。

正課外の国際共修としての事例も少なくない。異文化サークルの日本人学生と留学生会の学生とが協働的活動を通してどのように信頼関係を構築していくかを1年にわたって観察した神谷ほか(2007)の研究も興味深い。「対等な関係」からスタートした両者は、協働的活動の中で葛藤を抱えながら課題を解決し達成感を共有することで、互いの信頼関係を強めていく過程が述べられている。

多文化交流合宿に参加した留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験について調査した小松(2015: 178)では、合宿における教育的介入が留学生と日本人学生の友人形成を促進させる効果を持つことが示唆されたとしている。その一方で、この交流が継続されるには「多文化交流合宿後も大学キャンパスにおいて交流機会が保障されること」や、「学生側が積極的に交流の支援を生かすことができなければ友人形成は促進されないという側面も垣間見えた」ことが書かれている。

八島(2016: 40)では、「国際ボランティア・プロジェクト」の参加者を対象に面接調査や質問紙調査を行い同プロジェクトの学びの質について考察しているが、その中で参加した日本人学生に対する半構造化面接のデータを質的に分析している。分析結果からは協働体験の中で「異言語・文化を起源とするコンフリクト」が発生し、コンフリクトの解決への道筋を語っていくなかで、学生たちは、日本人と参加者の多くを占める西洋人の違いを強く意識する姿が詳述されている。

正課外共修の実践について詳細に記述した恩村ほか(2020)では、英語で学位を取得する留学生と日本語で学位を取得する国内学部生による多文化間共修の実践を振り返り、その実践から見てきたことや今後に向けての課題を、日程やアクティビティのタイミン

グ、言語能力、振り返りなどいくつかの側面から考察しているが、提示された課題には、多文化間共修を正規授業として設置することで解決できるものもあると述べている。

さらに野瀬ほか（2021: 13）では、日本語教員課程受講生を対象にインタビュー調査を実施し、留学生への日本語支援などの正課外活動への継続的な参加までの経緯と、参加によって生起する日本語教育の知識・技能・態度に関する学習の特徴について分析している。分析の結果、「受講生は、留学生との関係性が構築されていくことで正課外活動に継続的に参加するようになるとともに、正課外活動の中で得た知見を教育実習の学習活動にも活かしていこうとすることが明らかになった」とする。

このようにいくつかの正課外の国際共修の実践から見えてくるのは、正課外であっても、共修に参加した学習者は、言語や文化背景が異なる他者との協働活動を通して、様々な気づきを得たり、コンフリクトにぶつかりながら他者との関係性を構築していく過程を体験しているということである。しかし一方で、正課外共修の継続の必要性も指摘されている。キャンパス内でこのような共修の場が継続的に設置され、学習者側も交流の機会を活かすことができなければ共修の効果も一時的なものになってしまうという可能性も示唆されている。国際共修の「意義が広く理解、共有され、より多くの高等教育機関において多文化間共修の実践を大学教育課程の中に位置づけ、正規授業として設置していくことが望まれる」（恩村ほか, 2020: 52）とする先行研究には筆者も頷ける。ただ、各教育機関にはそれぞれの教育方針があり、多くの教育機関で国際共修が正課のカリキュラムに組み込まれるには一定の時間が必要であろう。課外活動であっても国際共修が成り立つかどうかを論点として考察した末松（2020: 9）では、「正課、課外活動には、それぞれの特徴に応じた優位性があり、学生の異文化間能力の発達にも異なる関わり方をしている」とされている。今後も、正課同様に、正課外の国際共修の実践は必要で、その調査や研究の蓄積により課題が発見され、よりよい実践へと改善されていくことが望まれる。そのような中、本稿での報告は一つの参考事例となると考える。

3. 研究方法

3.1 実践の概要

本節では、2021年度に筆者を含む教員2名が私立大学内で実施した正課外国際共修の実践概要について述べる。同大学内には正課の国際共修は設置されておらず、言語や文化背景が異なる学生同士が学び合える機会は非常に少なかった。

そこで、2021年10月に、学年や文化背景が異なる参加学生が共にSDGsの17の目標に関連づけてキャンパスの周辺で課題を発見し、自分たちに身近なSDGsについて考え実践するというプロジェクト型協働活動を6か月に渡り実施した。

この正課外国際共修としての異文化間協働活動には1年生～3年生までの11名の学生が参加した。参加学生の出身地は、それぞれ日本国内5名、ベトナム3名、中国1名、台湾1名、スリランカ1名であった。6か月の間に10回合同ワークショップを設けたが、

第3回、第4回、第5回、第7回の4回は外部講師とともにSDGsについて学び考えるというワークショップを行った。その他は3つのグループに分かれ、それぞれのグループ毎にSDGsについて問題や課題を発見し、問いをたて、その課題を解決するProject Based Learning (以下PBL)を行った。各グループの構成メンバーは、以下の通りである。本稿では日本国内出身者を国内学生とする。

グループ1：国内学生2名、ベトナム出身学生1名、スリランカ出身学生1名

グループ2：国内学生2名、ベトナム出身学生1名、中国出身学生1名

グループ3：国内学生1名、ベトナム出身学生1名、台湾出身学生1名

教員は、合同ワークショップ時に参加学生のPBLの進捗状況を確認したり相談に応じたりするが、できるだけ学生が協働で主体的に学びを生み出していくことを目指した活動設計を心掛けた。そのため、予め計画された合同ワークショップ以外は、各グループのメンバーが都合のつく日や時間帯にグループ毎に集まってPBLを進めていった。各グループでそれぞれ活動した後は、「振り返りシート」を書いて提出することを取り決めていた。

それぞれのグループはSDGsの17の目標から1つを選択し、それに関連づけて課題を発見し課題を解決する方策を考えた。グループ1は「SDGs14 海の豊かさを守ろう」に関連づけて大学周辺地域の海岸付近のゴミ問題を考えるツアーを企画したが、実践はできず調査のみ行った。グループ2は「SDGs11 住み続けられるまちづくりを」に関連づけて、色々な人にとって住みやすい地域づくりの実現のため、大学周辺地域に住む外国人と日本人が食に関するイベントを通じて文化を共有する企画をしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で実践にはつながらなかった。グループ3は「SDGs7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに & SDGs 13. 気候変動に具体的な対策を」に関連づけて、学内で省エネを呼びかける多言語のポスターを作成したほか、自分たちでデザインしたエコバックを作成し、オープンキャンパスに参加した高校生に配布した。

後半で課題の実践が具体的にになってきた段階では、数名の大学内の職員の方にも合同ワークショップに入って課題の実現性についてアドバイスしてもらった。途中で2名の日本人学生が活動をやめてしまうといったことや、新型コロナウイルス感染拡大により対面での活動が自由にできなくなるなどの状況もあったが、3月には学内のオープンキャンパスで各グループのPBLの成果を発表して活動は終了した。

3.2 インタビュー調査と分析

活動終盤の2月後半に参加学生を対象に半構造化インタビューを実施した。本研究では、この異文化間協働活動の中で参加しにくさや困難を感じることはなかったのか、あったとすれば、それをどのように解決したのであるかということ「問い」の中心に据えているため、特に以下の質問項目について分析を行った。

- ・活動に参加して困ったことやイヤだったこと。その理由やその時の状況。
- ・活動に参加してどんな能力が身に着いたと思うか。

- ・グループの人たちと接してどんなことを感じたか。
- ・文化のちがう人が一緒に仕事や活動をするとき、気をつけることや、大切にすることは。

インタビューに応じたのは途中で活動をやめた国内学生2名を含む10名（国内学生5名、ベトナム出身学生2名、中国出身学生1名、台湾出身学生1名、スリランカ出身学生1名）である。本節以降、上記のインタビュー協力者を「データ提供者」とする。インタビューは教員と参加学生1対1の形式で1人約20分程度行った。当時新型コロナウイルス感染拡大が深刻であったため、すべてZOOMを使用した遠隔で実施した。使用言語は9名が日本語、1名の中国出身学生のみ中国語で行い、調査目的を説明し許可を得て録音をした内容を文字化した。中国語の文字化データは筆者が日本語に翻訳して分析を行った。文字化したデータの分析には木下（2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTAと略称）を用いた。

本研究の分析にM-GTAを用いた理由は、この理論が、人間と人間の直接的なやりとり、すなわち「社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れた理論」であり「研究対象とする現象がプロセス的性格をもっていること」（木下, 2003: 89-90）だからである。言語や文化背景が異なる学生同士の直接的な協働活動における参加学生の感じ方や行動、そしてそのプロセスを追って分析していくのにM-GTAは適していると考えた。M-GTAでは文字化データを丹念に見ながら、「概念」「定義」「具体例」「理論的メモ」という4つの欄で構成された「分析ワークシート」を記入・作成していく。データ提供者の語りから得られた具体例を解釈し簡潔な説明を「定義」欄に書き込み、定義をさらに凝縮した言葉にして概念を生成し、さらに概念と概念を個別に比較検討し複数の概念の関係を検討しカテゴリーを生成する。「概念やカテゴリーが相互に関連づけられ論理的にまとまった段階、分析テーマで設定したプロセスが明らかになったとき」を理論的飽和（木下, 2016: 8）とし、最終的に分析結果をストーリーラインとして簡潔に記述し、生成したカテゴリーや概念間の関係性を結果図で示す。M-GTAにおける概念とは「データを解釈して得られる仮説的なものであり一定程度の現象の多様性を説明できるもの」（木下, 2003: 25）であり、一般的な「概念」の意味とは異なる。

4. 分析結果と考察

4.1 結果図の概要

文字化したデータを丹念に見ていった結果、57概念、9カテゴリー、1サブカテゴリーが生成され（表1）、それらの関係を結果図（図1）に表した。結果図は時系列にそってA) 参加前、B) 活動中、C) 活動を振り返って、に分けた。概念の後の数値は概念構築の根拠となったデータ提供者数である。以下では、結果図の流れに沿って詳しく述べていく。その際、カテゴリーは【 】, 概念は[]で示す。また、適宜インタビューの語りを留学生と国内学生に分けて「」で引用し、語りを解釈し概念を生成するポイントになった箇所には下線を引いて提示する。

表1 生成された概念とカテゴリー一覧

カテゴリー	NO	概念	定義
期待	1	自主的活動の魅力	学生主体の自主的活動に期待している
	2	留学生との交流	留学生との交流に対して期待している
	3	SDGsについての知識	SDGsの知識が得られることに期待している
活動の経験	4	異文化間協働活動の経験はない	これまでに同様に異文化間共同活動の経験はない
対面のメリット	5	お互いをよく知れる	対面で話したほうがお互いをよく知ることができる
	6	人としゃべる機会	多くの人としゃべる機会ができる
	7	相手の表情見えて話しやすい	対面で話すとき相手の表情が見えて話しやすい
異文化への気づき	8	男女平等について考え方の相違	自国と他の国や地域では男女平等についての考え方に違いがある
	9	留学生の明るさ、人懐っこさ	日本人よりも留学生の方が明るく人懐っこい
	10	日本が衛生的だと実感	留学生の国や地域よりも日本は衛生的だと話す中で実感した
	11	文化背景の違いの実感	自国と他の国や地域の文化背景は違うと活動の中で実感した
	12	自国以外の興味や理解の深まり	他の国や地域の人と話してその文化への興味がわき、理解が深まった
困難	13	日本語でのコミュニケーション	(一部の留学生にとって)日本語でのコミュニケーションは難しかった
	14	プロジェクトの中身	キャンパス内のSDGsの課題発見や問いを立てることが難しかった
	15	グループ内での自分の立ち位置不明	グループ内での自分の立場や役割がわからないことがあった
	16	積極的にできない	積極性がなくグループ内で意見を述べたり議論することが難しかった
	17	スケジュール調整	グループ活動に合わせた自身のスケジュール調整が難しかった
	18	留学生との意思疎通	(一部の国内学生にとって)留学生と意思疎通することが難しかった
	19	自主性が求められること	自分たちでグループ活動を進めていかなければいけないことが難しかった
	20	分かりやすく簡潔に伝えること	話し合いなどで相手に分かりやすく簡潔に伝えることが難しかった
	21	留学生もいる中での意見調整	文化背景が違う人がいるグループ内で意見をまとめるのが難しかった
	22	自分の考えを言う	相手の文化や立場を考えて自分の意見を言うのが難しかった
	23	パソコンの使い方	パソコンで資料を作ったり共有することが難しかった
	異文化協働活動 ストラテジー	24	先輩との関係や敬語使い
25		みんなと一緒に考える	1つ1つの課題に対してみんなと一緒に考えること
26		分かりやすい言葉に置き換えて話す	話す相手が理解していない時、違うわかりやすい言葉に変えて話すこと
27		それぞれの考え方は違うので、その根拠を重視	相手との考え方の違いはどこから来るのかよく考えること
28		価値観の尊重	相手の価値観を尊重すること
29		分からないことを聞く、相手が分かるように伝える	自分がわからないことは聞き、相手がわかるように伝えること
30		相手の意見や理解をよく聞いて、自分が思っていることを言う	まず相手の意見や理解度をよく聞いて、自分の考えを言うこと
31		言語とか行動とかが違うこと	言葉やすることが違うことが異文化
異文化とは	32	個性を尊重すること	その人それぞれの個性を尊重する文化
	33	自分と違う	自分と違う人はすでに異文化
	34	考え方と感じ方と行動全部が違うって思っていたほうがいい	考え方、感じ方、行動すべてが違うと思ったほうがいい文化
得られたもの	35	プロジェクトの進め方	プロジェクトをどのように進めていくかの知識や方法を得た
	36	シナジー効果	1人ではできないことが仲間と一緒にできるという体験を得た
	37	留学生を通じた考え方の広がり	留学生と接することで自身が知らなかった知識を得た
	38	先輩や留学生など自分と違う経験	先輩や留学生の学生生活や学習方法を知ることができた
	39	SDGsについての理解	SDGsについて深く理解した
	40	留学生とのコミュニケーションのきっかけ	今後、留学生とコミュニケーションするためのきっかけが得られた
	41	色々な人とのつながり	自身と違う国や地域の人や異なる世代や立場の人と知り合えた
得られたもの サブ：能力やスキル	42	発表のスキル	考えをまとめて発表するスキルが得られた
	43	自信	自分ができると思っていたことができず自分が得られた
	44	コミュニケーションのスキル	人とコミュニケーションするスキルが得られた
	45	ない	得られた能力やスキルはない
	46	留学生への情報や気持ちの伝え方	留学生に対して情報や気持ちを伝える方法が身についた
活動を経て 新たに生まれた考え方や態度	47	意見調整力	様々な人たちがいるグループ内で意見を調整するスキルが得られた
	48	いろんな意見があり、それぞれの経験にむきびついている	それぞれの意見は各々の経験に結びついていると考えるようになった
	49	環境や節約の重要性	環境保護や資源の節約をすることは大切だ
	50	プラス思考への志向	仲間の影響でプラス思考で考えたいと思うようになった
	51	自分が知らないことがまだまだ多と思うようになった	自分が知らないことがまだまだ多と思うようになった
	52	シナジー効果の素晴らしさ	1つのゴールに向けてみんな一緒にがんばることはいいなと思った
	53	留学生に対し日本人の学生が積極的になるべき	以前あまり話しかけられなかった留学生に対し積極的になった方がいい
	54	留学生にとってのアルバイトの重要性	留学生にとってアルバイトは生活にとっても重要だとわかった
	55	分かりやすい日本語	わかりやすい日本語はどのような表現か考えるようになった
	56	留学生に分かりやすく「これをやる」と伝えるべき	日本人同士だと伝わらなくても済むことは留学生にはわかりにくい
	57	留学生と考え方全然違うこと実感	留学生とは色々な考え方が違うのだと活動を通して考えるようになった

4.2 参加前の期待

参加前、データ提供者のほとんどが今回のような【活動の経験】では「異文化間協働活動の経験はない」と語っている。そして、活動を通して「SDGsについての知識」が得られることや「自主的活動の魅力」にひかれて参加したものもあれば、普段接する機会の少ない「留学生との交流」を期待した国内学生もいた。

4.3 活動での気づきや困難さ

そして、活動が始まるわけだが、データ提供者は活動について「お互いをよく知れる」

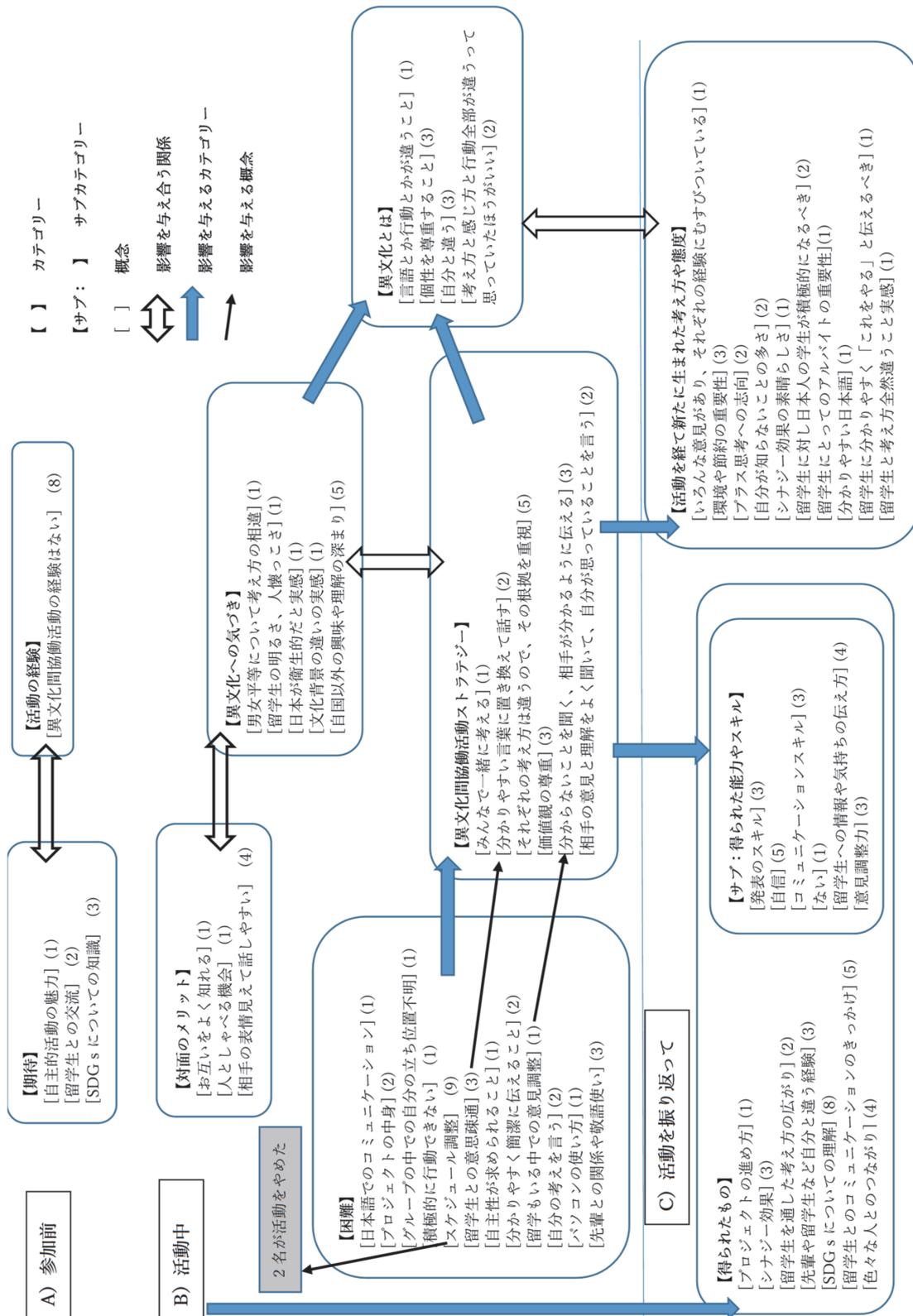


図 1 結果図

[人としゃべる機会] [相手の表情見えて話しやすい] などの【対面のメリット】を述べている。新型コロナウイルス感染拡大でそれまでの約1年半多くの授業がオンラインだったという状況が影響していると考えられる。

対面でこれまで接したことのない人々と接し、データ提供者は[男女平等について考え方の相違] [留学生の明るさ、人懐っこさ] [日本が衛生的だと実感] [文化背景の違いの実感] [自国以外の興味や理解の深まり] などの【異文化への気づき】を体験する。たとえば、[留学生の明るさ、人懐っこさ] や [自国以外の興味や理解の深まり] では、以下のような語りが聞かれた。

国内学生 A 「日本人っていうくくりと、外国人っていうくくりが、全然違うっていうか、うまく言えないんですけど、自分のレッテルが、自分が思い込んでいた部分があったり。だけど、××さんとか××（人名：筆者による伏字。以下同様）とかが、全然違うなっていうか、レッテルはがして、こっちまで来てくれたみたいな感じが。そういう外国人の人って、本当にすごい」

留学生 A 「本当に中国とかベトナムとか台湾とか、その国の問題とか、どんなことをやってるか、私は分かりませんでしたけど、友達と話したら、この状態が分かるようになりました。その国のこととか文化とか。それ、本当に面白かった」

しかし、活動する中で [スケジュール調整] [留学生との意思疎通] [日本語でのコミュニケーション] [先輩との関係や敬語使い] といった【困難】にもぶち当たる。言及が最も多かったのが [スケジュール調整] である。正課のように時間や教室が決まっておらず、単位も認定されない中、プロジェクトを進めるためにはグループメンバーの空いている日程を調整しなければならない難しさがあった。途中で活動が続けられなくなった2名のデータ提供者もその理由を以下のように振り返っている。

国内学生 B 「本来は自分たちで集まらないといけない場面なんですけど、なかなか、優先順位が、授業のほうの方が気になっちゃうので、授業とか課題とか」

国内学生 C 「自分は、やりたかったけど、時間が合わなかったなっていうのが、一番の課題っていうか」

特に留学生はアルバイトをしている者も多く、

留学生 B 「活動するときに、アルバイトのシフトが入ってる時が困ります」

という発言もあった。そのような状況下、お互い時間を調整しながら会っていた様子も聞かれた。

国内学生 D 「一応、暇な時間とありますが、この時間なら行けるっていうという時間を聞いて、みんなでそこで集まりましょうということで、集まった次第であります。そのときは、まだ全然、対面授業とかもありまして、結構、割とそのときはコロナが流行してなくて、どんどん対面になっていくんじゃないかっていう風潮があったんで、結構、みんな会いやすい環境ではあったのかなと思います」

また [留学生との意思疎通] に難しさを感じていた国内学生は

国内学生 F「留学生の分かったは、どこまで分かってるのが分からなくて、私には。100パーセント分かってるのか、でも向こうも多分、分かったと思って分かったって言ってるから。こっちの分かったと、多分、違うところがあるから。そこに毎回、困ってました。分かってるのはどこまでかなって思いながら」

国内学生 B「SDGsの17個の目標を理解するっていう課題があったと思うんですけど、それを見ていくときに、17個、読み上げるだけで、留学生の子たちは、これが分からないっていう単語が、結構、たくさんあって。私たちにとっては、当たり前の単語だったけど、例えば、健康とか、福祉とか、単語そのものに意味があるけど、私には、あまりうまく説明できなくて、そこが難しかったです」

国内学生 C「あまり、通じなかった。言葉が多分、難しかったのかなって思って、あまり、たずねることができなかったです」

などと話している。活動の中で使用言語の指定はしなかった。時々英語を使うこともあったようだが、日本語を学習中のアジアからの留学生が多かったこともあり、使用言語は専ら日本語だったようである。そのため、国内学生の方が言葉による意思疎通の難しさを感じていたことがわかる。一方、自身の日本語に自信がなかった留学生もいたことが以下のコメントからわかった。

留学生 C「一緒に話すとなると、日本語が不自由なので、ちょっと難しいですね」
また、[分かりやすく簡潔に伝えること] [留学生もいる中での意見調整] [自分の考えを言う] などのディスカッション上の困難を抱えていたこともわかった。

国内学生は [先輩との関係や敬語使い] にも【困難】を感じていたことが以下のコメントから感じられる。

国内学生 A「やっぱり先輩とかを意識してしまって、ちょっと言いにくいなっていう部分もありました」

国内学生 F「日本人同士だと絶対敬語じゃないですか。敬語使わないといけないっていう絶対的な決まりみたいなものがあるけど、留学生とだと、楽しく話すっていう面では、がちがちに敬語だと私が全然楽しく話せなくて」

その他に、[グループの中での自分の立ち位置不明] [積極的にできない] [自主性が求められること] など、参加者が自主的にまた主体的に動かなければ進めていけない協働活動で戸惑う姿もかいま見られた。

4.4 異文化間協働活動ストラテジー

しかし、その中でも [みんなで一緒に考える] [分かりやすい言葉に置き換えて話す] [分からないことを聞く、相手が分かるように伝える] [相手の意見と理解をよく聞いて、自分が思っていることを言う] といった【異文化間協働活動ストラテジー】をみつけていった様子も以下の語りから観察された。

国内学生 D「日常会話、日本人だけしか使わないような表現をやっぱり避けたりとかです

とか。極力、留学生にも分かりやすいように。自分の立場で考えたときに、やっぱり自分らが外国の人から、その人たちの話し言葉で話されても、たまに分かんないことってあるわけじゃないですか。なので、やっぱり相手にも伝わりやすいように、できるだけ標準語と言いますか、普通の言葉使いでしゃべるようにはしました

国内学生 A 「××とかが、柔らかく、日本語をかみ砕いて説明してくれたので、あんまり自分的には身ぶり手ぶりのほうが多かったなと思います

国内学生 B 「なんか、漢字的な、難しい言葉じゃなくて、小学生とかでも分かるような言葉をいっぱい使ってて、例えば、多いっていう言葉を、大きいとか、いろんな言葉に置き換えて、分かるように説明してくれた

日本語の自信のなさをコメントしていた留学生も以下のような発言をしている。

留学生 C 「(私の) 日本語が不得意だから、みんなが親切でした」

[それぞれの考え方は違うので、その根拠を重視] [価値観の尊重] することも協働活動の中で気を付けたようである。

国内学生 D 「絶対、日本人同士でもそうですけど、あんまり人の言動とか行動をばかにするっていうのは、良くなくて、お互いの価値観を尊重し合うというのが、すごい大事だと思いますね」

留学生 D 「人それぞれ異なる点があるのは当たり前のことだし、それを全部、自分に合わせるのもおかしいので。向こうの文化も尊重して、理解してあげて、それによってもっと自分の知識の幅を広げることができると思う

さらに【異文化とは】[言語とか行動とかが違うこと][個性を尊重すること][自分と違う][考え方と感じ方と行動全部が違うって思っていたほうがいい]という考え方で、客観的な姿勢によりグループ内の関係をとらえるようになった様子も見えた。

4.5 活動を振り返って

活動を振り返って、データ提供者からは[SDGsについての理解][留学生とのコミュニケーションのきっかけ][色々な人とのつながり]など様々に【得られたもの】についての語りが聞かれた。

留学生 D 「SDGsについてはニュースでちょっと聞いたことがあるぐらいだったんですけど、今回をきっかけにいろいろと調べて、第18のSDGsとかも勉強というか、その知識も深めることができてよかった

国内学生 F 「自分が選んだ人とかじゃなくて、活動を通して出会った人もいたから、いろんな人との関わりができたのはよかったなと思いました

国内学生 A 「日本人の友達とかといると、自分に似た人としか話さなくなったりするので、留学生とか、ちょっと自分と違うジャンルの子たちでも、こういうふう考えてるんだって、わくわくしたり、どきどきしたりして、接するのが楽しくて、コミュニケーションするの楽しいなって思いました

留学生 C「授業の後、イベントの後、グループのみんなが集まって、ディスカッションなどをして、そこから先輩たちといろいろな知識を学びましたね」

国内学生 D「留学生だけじゃなくて、他のグループの日本人の学生でしたり、いろんな社会人の方とコミュニケーションが取れたのはすごい」

留学生 B「多分、1人は、自分で考えるときは、いっぱい意見出さない」

と話す留学生 B の語りからは、協働活動により「シナジー効果」も生まれていたことが分かった。

さらに【得られた能力やスキル】として「意見調整力」や「コミュニケーションスキル」「発表のスキル」「留学生への情報や気持ちの伝え方」という概念が生成された。

留学生 C「みんなで話したときのコミュニケーション能力や組織力は、その点では、お互いに団結して、それから多くのことを学ぶことができたと思います」

留学生のデータ提供者からは「自信」という概念を表す発言も聞かれた。

留学生 A「日本人と一緒に日本語で話して、自分の意見、言って、他の意見も分かるようになることと、日本のプロジェクト、どんな形かをよく勉強してて、これに参加して自分の意見のいいことは勉強しました。自信とスキルがアップします」

国内学生 F「自分の意見をちょっと言ってから周りの人の意見も引き出すっていうのは、前よりできるようになったかなと思いました」

そして、「いろんな意見があり、それぞれの経験にむすびついている」「環境や節約の重要性」「プラス思考への志向」「自分が知らないことの多さ」「シナジー効果の素晴らしさ」「留学生に対し日本人の学生が積極的になるべき」「留学生にとってのアルバイトの重要性」「分かりやすい日本語」「留学生に分かりやすく「これをやる」と伝えるべき」「留学生と考え方全然違うこと実感」などの【活動を経て新たに生まれた考え方や態度】が生じていることも分かった。

5. 考察

前章で述べたように、データ提供者らは、活動を通じた気づきや活動で得られたものも多くあったということが分かったが、参加のしにくさや困難さを感じていた姿も見えてきた。

本研究での正課外異文化間協働活動で、多く生成された【困難】の概念は「スケジュール調整」である。これは恩村ほか（2020: 47）でも「授業はもちろんアルバイトやサークル活動で忙しい学生が、授業時間以外に定期的に集まれる時間を確保するのは容易ではなかった」と述べられているが、本研究でもデータ提供者からの語りから、同様のことがいえた。途中で活動が続けられなくなった2名の理由も「スケジュール調整」の難しさであり、学習も忙しい中で単位が付与されない活動への参加がだんだん負担になっていったことが語りから分かった。一方で、そのような中でも SNS などで連絡を取り合い定期的ミーティングを重ねていたグループもあり、正課外の「スケジュール調整」に【困難】があっ

たととしても、必ずしも全ての参加者が最後までモチベーションを保ち続けられないわけではないということはいえる。活動をやめてしまった1名からは「多分、先生がたから、ここにみんなで集まってくださいって、水曜日のここに集まったほうがいい、みたいなのを言ったほうが」望ましい、という発言が聞かれた。各参加者のスケジュール調整が難しかったとしても、常に「そこに行けば仲間がいる」といった場所があれば、正課外であっても活動が続けやすい状況が作れることも示唆される。

また、特に国内学生であるデータ提供者の発言からは「留学生との意思疎通」に【困難】を感じていることが分かった。これは活動中の使用言語のほとんどが日本語だったにも関わらず、留学生と意思を通わせることが難しかったということである。留学生の日本語レベルは初中級以上で会話をするのには大きな問題はなかったはずである。意思疎通の難しさの原因の一つは、SDGsの用語の難しさもあった可能性があるだろう。しかし、それだけではなく、文化背景の違いも関与する課題への取り組み方やディスカッションの際の「意見の述べ方」にも違いがあったことも考えられる。「活動の中で、自分が当たり前だと思ってることとか、多分、全員日本人だったら、私が1人でスライドをつくることもなかっただろうし」と発言した国内学生もいた。この発言は、仮に日本人同士ならそれほどはっきりと要求しなくても課題の責任分担ができたはずだが、留学生にはその要求が伝わらなかったという状況を表している。日本人だったら通じ合えることも、留学生には言葉ではっきりと伝えることが必要だと感じた体験を示しているといえる。

また、特に国内学生は日本人同士で「先輩との関係や敬語使い」を意識するということも、【困難】の一つであった。これは正課のようにある程度決まった学年や学科の学生が参加するわけではない正課外特有の【困難】であり、留学生からの発言からは生成されない概念であった。

また、参加者が自主的にかつ主体的に動かなければ進めていけない協働活動で戸惑う姿もかいま見られた。その他に、「プロジェクトの中身」に【困難】を感じていたという語りも少数だが聞かれた。具体的にはPBLにおけるSDGsの課題発見や問いを立てることが難しかったということで、そのことに苦戦していた姿も確かに見られた。しかし、この活動では教員のほか、外部講師や大学内の職員などもPBLを進める学生の相談に応じたり、アドバイスやヒントを投げかけたりしていた。そのような環境があったことで、データ提供者らは【困難】を克服していったと考えられる。

活動を続けたデータ提供者らは、グループの中で【困難】を感じながらも、その後、様々な【異文化間ストラテジー】を見出していった姿は興味深い。本研究における異文化間協働活動では、スケジュール調整を含めた他者との接し方に悩みながら、その解決法を探っていた参加学生の姿を見ることができた。

6. まとめと今後の課題

本研究では、正課外の異文化間協働活動のインタビュー分析を通して、正課外国際共修

の参加のしにくさや難しさを探った。その結果、参加者同士のスケジュール調整の難しさのほかに、特に国内学生が、留学生との意思疎通の難しさや先輩との関係、また、自主的にかつ主体的に動かなければ進めていけない協働活動などに難しさを感じていることが分かった。しかし、難しさにおち当たっても、工夫して活動を続けていたグループもあった。それには、それまで付き合ったことのなかった者同士が一緒に何かを達成するという「ワクワク感」に魅かれていたという側面もある。

しかし今後同様の正課外異文化協働活動を続けるうえでは、たとえ参加学生の主体性を重視する活動であっても、なるべく予め固定したスケジュールを提示して参加計画を立てやすくすることがまず必要である。また参加学生同士が SNS などで連絡をとりあう他にも、自分のグループや他のグループの活動状況やスケジュールが共有できるプラットフォームを提供または提案することで活動はよりスムーズになることが期待できる。

PBL においては大学内外の外部講師や職員が色々なアドバイスやヒントを投げかけることにより参加学生が困難を乗り越えることもできたが、様々な年齢や文化背景をもつグループ内の人間関係や意思疎通の難しさが活動継続を困難にさせることがないように、担当教員が参加学生の活動状態に気を配り、必要があればいつでも相談に応じる姿勢を示すことも大切であろう。ただ、前節で見てきたように、参加学生の多数は困難にぶつかっても、自ら様々なストラテジーを見出し、活動の最後までモチベーションを維持させていた。学生の自主的な活動に教員がどのぐらい「介入」していくかの匙加減は簡単ではないが、困難と感じていることに気を配ることは重要だと考える。さらに、ラーニングコモンズなど参加学生が集まりやすい場所を提示して、正課外であっても活動を続けやすくすることも、活動のデザインをする際に考慮すべきであろう。

正課外の国際共修では、参加人数が限られていることもあり、異文化間能力 (intercultural competencies) (Byram, 1997; Deardorff, 2006) の伸長を数値的に測ることが難しい側面もある。しかし、4章で述べたように異文化間協働活動の参加者は、【困難】から、それを解決するストラテジーを見出し新しい考え方を持ち始めた姿も見えた。この参加者の変化プロセスを今後、もう少し詳細に分析していくことや、活動後に参加学生が協働活動で得た学びを活かしているのかを調査することで、活動を通してどのような新たな能力を得ているのかを明らかにしたい。

付記

本研究の一部は「第 27 回 留学生教育学会 年次大会」で発表した。

引用文献

- 恩村由香子・森美紀・山岸愛美 (2020). 「多文化間共修プログラム開発に向けた課題—実践の考察から—」東京国際大学・CEGLOC 外国語教育部門紀要『外国語教育論集』, 42, 39-52.
- 川平英里 (2019). 「正課外における国際教育交流の現状と課題に関する調査 —大学教職員の視

- 点に着目して一」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』, 6, 17-25.
- 神谷順子・中川かず子 (2007). 「異文化接触による相互の意識変容に関する研究: 留学生・日本人学生の協働的活動もたらす双方向的効果」『北海学園大学学園論集』, 134, 1-17.
- 木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂.
- 木下康仁 (2016). 「M-GTA の基本特性と分析方法— 質的研究の可能性を確認する—」『順天堂大学医療看護学部 医療看護研究』, 18, 1-11.
- 小松翠 (2015). 「留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験とはどのようなものか: 多文化交流合宿3か月後のインタビューから」『お茶の水女子大学人文科学研究』, 11, 165-179.
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子編 (2017). 『多文化間共修—多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』 学文社, iii.
- 末松和子 (2019). 「国際共修の検証—文献リサーチを通して見えてくるもの—」ウェブマガジン『留学交流』2月号 Vol.95, 独立行政法人日本学生支援機構, 1-12.
- 末松和子 (2020). 「正課外国際交流活動における国際共修—成果に比した活動の特徴と学生の学びに着目して—」『留学生教育』, 25, 9-19.
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編 (2019). 『国際共修: 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』 東信堂, iii.
- 高橋美能 (2021). 「多様なバックグラウンドを活かす国際共修授業の実践—オンラインで実践する授業のメリットとデメリット—」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』, 7, 79-90.
- 野瀬由季子・大山 牧子・岩居 弘樹 (2021). 「継続的な正課外活動への参加を通じた学習と教育実習との関連性—日本語教員養成課程受講生へのインタビュー調査から—」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』, 19, 1-15
- フランシス・カルトン (2015). 堀晋也 (訳) 第1章「異文化間教育とは何か」西山教行・細川英雄・大木充編『異文化間教育とは何か』くろしお出版, 9-22.
- 溝上慎一 (2009). 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が成長を示す」『京都大学高等教育研究』, 15, 107-118.
- 八島智子 (2016). 「国際協働プロジェクト参加を通しての『学びの質』」『関西大学外国語学部紀要』, 15, 33-50.
- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon, Multilingual Matters.
- Crowther, P., Joris, M., Otten, M., Nilsson, B., Teekens H., Wächter, B. (2000). *Internationalization at home*. A position paper, Amsterdam: EAIE
- Deardorff, D. K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. *Journal of studies in international education*, 10 (3), 241-266.
- Leask, Betty, Carroll, Jude. (2011). Moving beyond 'wishing and hoping': internationalisation and student experiences of inclusion and engagement. *Higher Education Research & Development*, 30 (5), 647-659.
- Soria, Krista M. and Troisi Jordan. (2013). Internationalization at Home Alternatives to Study Abroad: Implications for Students' Development of Global, International, and Intercultural Competencies. *Journal of Studies in International Education*, 18 (3), 261-280.

Practices and difficulties of extracurricular intercultural collaborative activity

- through analysis of interviews with participating students -

Miho YAMAUCHI

(Department of International Tourism, Nagasaki International University)

Abstract:

How do students who have participated an extracurricular intercultural activity? Do they experience any difficulties in participating in the program? The author conducted an extracurricular intercultural program for six months from October 2021. Interviews were conducted with 10 of the participants and analyzed using M-GTA. As a result, concepts such as [schedule coordination] [communication with foreign students] were generated in the [difficulty] category. Although some participants quit the activity because of [difficulty] , we could see that some participants overcame [difficulty] by finding [intercultural collaborative activity strategy] . It was suggested that in order to reduce the [difficulty] of [schedule coordination] , it is necessary to create a regular place where it is easy to continue the activities.

Keywords:

Intercultural collaborative learning, extracurricular activities, Intercultural cooperative activities, difficulties, M-GTA